小児看護学演習の一つの試み
——家庭における乳(幼)児の継続観察——

兼松百合子　武市　雅代　西川　陽子
宮川　喜代　吉武香代子

Providing a learning experience in pediatric nursing:
Follow-up observation of infants and their home environment

Yuriko KANEMATSU, Masayo TAKEICHI, Yoko NISHIKAWA,
Kiyo MIYAKAWA, Kayoko YOSHITAKE

要旨　昭和53年度から，小児看護学の演習として3年次の学生に対し，家庭において一人の乳（幼）児を9ヵ月にわたり3回以上観察することを実施している。その結果，学生は乳（幼）児の成長発達過程，生活状態，母親の育児のしかたや家族の様子などの変化を実際に見て学ぶことができ，よい学習方法であることがわかった。

実施に当り，対象児を得ることにはほとんど困難はなく，学生の不安や緊張は最初はあるが次第に解消していく場合が多く，また家族の受け入れも大体よいことがわかった。

この学習の効果を高めるために，中間で2回，記録の提出と面接指導を行なっているが，今後，より充実した指導をしていくことが必要である。

Key words: 1) follow-up observation of infants
2) home environment
3) learning experience

I. はじめに

近年，小児看護学の教育内容の中で，健康児についての学習が重視され，体験的な学習方法が各所で工夫されているが，その多くは保育所や幼稚園での見学や実習である[1)~3)]。一人の子どもを長期間にわたって観察する方法は子どもの変化を実感できるためよい学習方法と考えられるが，保健婦の教育機関などで一部試みられているほかはほとんど実施されていない。その理由としては，対象児を得る上での問題と，学生が家庭などへ出かけて行って観察する場合のいろいろな困難や，指導者の負担などが考えられる。

千葉大学看護学部小児看護学講座
Department of Pediatric Nursing, School of Nursing, Chiba University

本講座では，昭和53年度より，3年次の学生に対して，「小児の成長発達と看護」の学習の一環として，一人の乳（幼）児とその生活環境を9ヵ月にわたって観察する演習を行い，学習成果が大きいことと，運営上の困難はほとんどないことがわかった。そこで演習のすすめ方や経過について記録にとどめておきたい。

II. 演習の位置づけと目的

本学部における小児看護学の教育目的には，小児の特徴および家族の重要性を理解させる，小児期に特有の疾患および小児期に多い疾患について，小児の特徴を中心に学ばせる，そして小児の健康の維持増進および健康回復のための小児看護の役割と方法を学ばせるなどが含まれている[4)]。その内容は，小児看護概論1単位（30時間），小児疾病

論2単位（45時間），小児看護方法1単位（30時間），小児看護実習3単位（135時間）から成り，3年次の4月から，成人看護学，母性看護学，精神看護学などの臨床専門科目と同時に開始される。これらのうち，見学，学内実習，見学実習，臨地実習に関する内容は，すでに本紀要第1号に紹介したとおりである[5]。

この演習は，小児看護概論と小児看護方法の中の,「小児の成長発達と看護」に関する学習であり，3年次の夏休みから後期終了時までの9か月にわたって計画されているものである。

本学部の学生は，2年次までに基礎看護学の中で障害児の施設を見学する機会を持っているが，健康な子どもとの接触のある学生は少なく，従って小児の成長発達の講義を聞いても実感を持って理解することは殆んどできない。そこで，スライドやビデオなどを使用してイメージを与えるようにしているが，詳細な観察点を理解させたり，子どもや母親の反応を通しての理解をはかることはできない。これらの問題を解決する一方法としてこの演習を考案した。

演習の目的は，一人の乳児または2才位までの幼児を，家庭において継続的に観察することにより，成長発達の過程を理解すると、もに，育児内容，生活環境，保育者のニードなどについて学習することである。乳児院や保育所などで対象児を観察するのではなく，家庭において観察することにしたのは，子どもの成長発達過程だけでなく，それに影響を及ぼしている母親のかかわり方や，生活環境などを同時に観察することを看護の視点として強調し，理解させるためである。なお，保育園における実習は，同年の夏休みに入る時期に，保育所で集団生活をしている乳幼児の日常の世話を通して，成長発達段階を理解することと，保育所の機能や組織・運営を理解することを目的として，1日の見学実習を行なっている。

III．演習のすすめ方と経過

1．対象児の選び方

学生の身近にいる乳（幼）児，または講座の教官から紹介した小児の中から1例を選択する。すなわち，学生の身内の子どもや，下宿先，アルバイト先などの子どもについて，保護者に自分で交渉して決定することをすすめ，どうしても対象児が得られない場合，教官が保健所を通じて得たケースを紹介している。保健所からのケースについては，53年度は保健所の乳児健康相談の会場で，教官が母親に趣旨を説明して了解の得られたケースに，後日，手紙で学生を紹介した。54年度以降は，その乳児健康相談が廃止されたため，助産婦による新生児訪問の終了したケースの中から，同年の1～3月に生まれたものを選び，教官が電話で保護者に趣旨を説明し，了解の得られたものに対して，後日，手紙で学生を紹介する方法をとっている。この方法によると，ほぼ同じ月齢の対象が得られ，ケースの数も多く，また，助産婦から「異常なし」と報告されているので安心して学生に紹介することができる。特に，無職の母親で第一子であり，団地住いの場合に承諾を得やすいようである。

このような方法で対象児を選び，昭和53年度は，自分でみつけたもの23名，紹介23名（このうち16名は保健所から，7名は学内の職員の子どもあるいは紹介），54年度は，自分でみつけたもの49名，紹介17名であった。経過をみると，身内のものを選び，馴れ合いでやりにくかった例や，帰省先で対象児を選び，帰省時に対象児が実家に帰っていて会えなかった例などがあったので，55年度は無理に自分で探さなくてもよいことにしたため，自分でみつけたもの14名，紹介42名となっている。

紹介したケースについては担当の学生を保健所に連絡し，問題が発生した場合には相互に連絡をとることにしているが，初年度より現在まで問題は全く起っていない。

対象児の月齢は，観察開始時12カ月未満のものが多い。54年度の対象児は表1のとおりであった。

2．観察期間および訪問時期

観察期間は毎年7月から翌年の3月までの9カ月間とし，原則として観察の回数は3回以上とした。そして訪問の日時は各学生が母親と連絡をとり，お互いに都合のよい日時を決定した。このように各学生が相手の都合に合わせて訪問する方法をとっているので，時間はすべて放課後や週末，

表 1. 初回訪問時の対象児月齢

月　齢	学生数
0 ～ 2	12（3）
3 ～ 5	25（12）
6 ～ 8	10（2）
9 ～ 11	8
12 ～ 17	8
18 ～	3
計	66（17）

（　）内は講座紹介ケース

休暇中の時間を用いることになっている。従って，あまり多くの観察回数を要求することはできないし，休暇中に帰省先で行う便宜も考え，最低3回としている。

実際に，多くの学生が3回（夏休み，大学祭のための臨時休業日または冬休み，春休み）実施しているが，毎年10名位の学生は4回以上実施している。

3．観察内容および記録

観察内容は，小児の身体発育，精神運動機能の発達，日常生活，育児の方法，生活環境，母親（保育者）のニードなどとし，53年度は表2のような観察項目を示し，記録の方法は自由形式とした。その結果，観察項目を盛り込んだ記録を自分で工夫したり，模造紙大の用紙に経過を一覧できるように書き表わすなど一部の学生に工夫がみられたが，全体として記録内容の差が大きく，最低基準を確保できないことがわかった。そこで54年度からは表2の項目を含んだ記録用紙を作り配布しているが，なお各自工夫した方法で記録してもよいことにしている。また，54年度から期間中少なくとも1回は1日の栄養分析を行い評価することを含めている。これらと同時に，乳幼児身長・体重パーセンタイル図表と，遠城寺式乳幼児分析的発達検査表も使用させている。

4．記録の提出および面接

9月と1月に期日を決めて観察記録を提出させ，教官が分担して，記録をチェックし，学生に個別に面接し，助言している。記録については，観察内容と方法の適否，発育，育児方法，疾患などについての問題点の有無，学生の行なった指導・助

表 2. 学生に提示した観察項目

1．家庭の状況
　住所・住居環境・家族構成（対象児との続柄・年齢・職業・健康状態）
2．初回訪問までの経過
　妊娠中の経過・分娩時の状況・産後の経過（この間の母親や家族の気持ちも含めて）・出生体重・在胎週数・新生児期および訪問時までの状況
3．訪問時の身体発育
　身長・体重・頭囲・胸囲・生歯・大泉門・呼吸数・体温（全体の評価と考察）
4．訪問時の精神運動機能の発達
　粗大運動・手指の運動・情緒・感覚および知的機能・言語・社会性（全体の評価と考察）
5．育児方法および日常生活（母親の世話のし方と基本的生活習慣）
　1日の生活時間・遊びとおもちゃ（母親の遊ばせ方）・栄養（食物の種類・形・量・時間・食べ方・食べさせ方）・排泄・清潔・衣服・外気浴や日光や戸外での遊び（全体の考察）
6．育児環境
　家族の育児へのかかわり方，母親の子どもに対する気持ち，部屋の中のようすなど
7．健康管理
　健診・予防接種・これまでにかかった病気など
8．その他
　観察者の感じたこと，指導・助言したことおよび母親から相談を受けたこと，学生の対応と母親の反応など

言の適否などを点検し，面接時には，対象児の家族に学生がどう受け入れられているか，また，学生がどんな気持ちで行なっているかを聞き，さらに，記録からチェックされたことを学生に助言している。

このほか，必要に応じて教官に相談し助言を得るようにすすめており，母親の質問にどう答えたらよいかという質問がしばしば聞かれる。

54年度の学生からは，面接時の指導教官を同一とした方がよいという意見や，助言を受けても次回訪問まで期間があるので役立たないという意見も聞かれたので，改善に努めている。

5．レポート提出と評価

各回の観察記録に全期間を通しての考察および感想を付して，春休み終了後にレポートとして提出させている。そしてこのレポートを「小児の成長発達と看護」の授業のテストに代えている。このことは演習のオリエンテーションの時に学生に伝えてある。53年度の学生においては，1名は対象児が転居したため別のケースを補い，3名が学生側の理由により1～2回の観察しかできず，後で補充学習をした。54年度は，中間の記録提出や面接を徹底した結果，レポート提出が著しく遅れたものが2名あったが，全員が3回の観察を完了した。

評価の方法は，3回以上の観察を行ない，所定の観察，分析，記録をしていることを基礎として，その内容が演習の目的に沿っているか，指導・助言の試みについて内容の適切さと相手の反応の見方，記録の内容や表現の明確さなどに着目して，三段階評価をしている。その結果，大部分の学生がB（普通）以上の評価を得ている。

IV．学生に対するアンケートの結果

この演習のすすめ方や成果について検討を加える一助として，54年度の学生に対して演習終了時にアンケートを実施した。66名中63名より回答が得られ，主な内容は次のとおりであった。

1．対象児の家族の受け入れについて学生が感じたことは表3のとおり，「とても良かった」「まあまあ良かった」が56名で88.9%を占めていた。学生が自分でみつけたケースと講座の教官から紹介したケースとの差はみられなかった。

表 3．家族の受け入れについて学生が感じたこと

とても良かった	39（9）
まあまあ良かった	17（5）
普通だった	6（2）
あまり良いとは言えなかった	0
悪かった	0
その他	1
計	63（16）

（　）内は講座紹介のケース

表 4．観察を続けていくうえで学生が感じたこと〈重複回答〉

訪問時はいつも気が重く緊張していた	7（3）
初めは気が重く緊張していたが次第にほぐれていった	26（10）
気楽に続けられた	29（3）
とても楽しく続けられた	19（7）
時間を見出すのが難しかった	19（4）
その他	2（0）
無　答	0（0）

（　）内は講座紹介のケース

表 5．対象児と家族に対する訪問の効果として学生が感じたこと

とても役立ったと思う	2（0）
少しは役立ったと思う	33（7）
殆ど役に立たなかったと思う	28（9）
全く役に立たなかったと思う	0（0）
計	63（16）

（　）内は講座紹介ケース

2．学生が観察を続けていくうえで感じたことは表4のとおりで，「初めは気が重く緊張していたが次第にほぐれていった」「気楽に続けられた」などの回答が多かった。訪問時はいつも気が重く緊張していたものも7名あった。また，時間を見出すのが難しかったと答えたものが19名で比較的多いが，それは，過密な時間割やアルバイトなどで学生が忙しい，対象児の母親が働いていて時間がとりにくい，帰省先で実施したため，などの理由が考えられる。

3．対象児・家族に対する訪問の効果として学生が感じたことは，表5のとおり，「とても役立っ

たと思う」「少しは役に立ったと思う」が35名（55.6%）あり，その理由は，子どもの成長発達について知ってもらうことができた，母親の育児への関心を高められた，少しでも相談にのることができた，母親が自分の育児を見直すきっかけになったと思う，などであった。一方，自分の訪問がほとんど役に立たなかったと思ったものは28名（44.4%）で，その理由は，何も質問されなかったし問題もないようだった，相談されてもその場で適切なアドバイスができなかった，調べて次に訪問した時にはすでに問題は解決していた，などであった。

4．学生からみた学習効果は，「とても勉強になったと思う」「勉強になったと思う」が59名（93.7%）を占めていた。（表6）その理由はさまざまであるが，子どもの成長発達の過程や生活時間，離乳食，母親の接し方，育児の大へんさなどを実際に見，実感を持って理解できたという内容のものが多かった。また，「あまり勉強にならなかったと思う」という答も2名あり，1名の理由はコミュニケーションが十分とれず，計測などを実施できなかったということであった。他の1名についての理由は不明である。

5．その他，改善すべきと思われる点について自由記述を求めたが，記録用紙のスペースの取り方についての意見が，2，3の学生から出されたほかは，特記すべきものはなかった。

V. 考　察

この演習は，乳（幼）児の成長発達とその環境を理解させることを目的として行っている。その学習成果を中間に提出した2回の記録の内容，面接時の学生の反応，最終レポートの内容などからみると，観察方法が次第に具体的になり内容が詳細になっていること，母親との関係が深まり母親の気持にも目が向いてきていること，観察だけでなく必要に応じて助言し母親の反応をみる余裕が出てきていることなどの傾向が見られた。そして学生により差はあるが，最終レポートからB（普通）以上の評価を大部分の学生が得たことは，この演習の目的が可成り達成されていると評価してよいと思う。このことは前述の学生に対するアンケートの結果からも裏付けられると考えられる。なお，学生に対して観察の内容や方法の指導をもっと徹底することによって，より大きな成果が上がるものと思われる。

表 6. 学生からみた学習効果

とても勉強になったと思う	7（1）
勉強になったと思う	52（15）
あまり勉強にならなかったと思う	2（0）
全く勉強にならなかったと思う	0（0）
その他	1（0）
無　答	1（0）
計	63（16）

（　）内は講座紹介のケース

この演習の運営に先立って懸念された対象児の確保については，前述のような方法によればそれほど困難ではなく，今後も続けられる見通しである。また，3年次の学生が一人で知らない家庭を訪問する場合の不安や緊張については，前述のアンケート結果のとおり初めは強いが次第に解消していく場合が多い。対象児の家族の受け入れはよかったと感じている学生が多いが，なお，対象児の母親が学生を受け入れてどう思っているかについては調査していないので，今年度調べたいと考えている。このように本演習の運営上の困難はそれほど大きくないと云える。

今後の課題としては，小児看護学講座の単独の計画ではなく，母性看護学講座の協力を得て妊娠中から観察することや，また3年次の後期に行われる地域看護の授業などにより補強され引き継がれるような形のものになれば，演習の位置づけも大きくなり，より大きな効果を期待できるのではないかと考えている。このような学習は，過重な授業日程で押し流されるような傾向の3年次の学習の中に，自分のペースでの体験的な学習の機会を作ることができるので，さらに充実させてもよいのではないかと思う。

終りに，対象児の選定に当り，毎年ご協力いただいている千葉県中央保健所保健指導課長，同保健婦長と，学生を快く受け入れて下さった対象児の家族の皆さまに心から感謝いたします。

文　献

1) 高橋俊子：教育研究レポート，小児看護学ーその考え方と組み立て方(2)，看護教育，18(8)：501－505，1977.
2) 杉本正子・桜井美知子・瀬谷美子：小児看護の教育における保育所実習の意義，看護教育，20(9)：551－557，1979.
3) 高橋佳子・花野典子：小児看護実習における通年保育所実習の試み，第11回日本看護学会集録，看護教育分科会，158－163，1980.
4) 履習の手引，昭和55年度，千葉大学看護学部
5) 吉武香代子・兼松百合子・宮川喜代・西川陽子：看護学部における実習の概要：小児看護学編，千葉大学看護学部紀要，1：36－39，1979.